OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西洋古典語における第二言語習得理論 ： ラテン語を中心に
Author(s)	小川, みなみ
Citation	平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2019
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71914
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

申請先学部　　文学部　採択番号　No.　2

平成３０年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	おがわ　みなみ 小川　みなみ	学部 学科	文学部人文学科	学年	３年
ふりがな 共　同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	渡辺浩司	所属	文学部		
研究課題名	西洋古典語における第二言語習得理論―ラテン語を中心に				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

研究目的

古典語、特に本研究で扱うラテン語には多くの活用があり、また現代語のように実際のコミュニケーションで練習することができないため、学習の困難を伴う言語である。さらに、文法の授業で習得した文法能力が文献を読む能力に直結しないことから、より実際のテキストに即して古典語を習得する方法はないかという疑問を抱くに至った。日本語母語話者に対するラテン語の教育法の研究はあまり進んでいない上、また第二言語習得や外国語教育の分野においても西洋古典語を中心にした事例は少ない。そこで本研究では、日本語母語話者がラテン語で原典を読む能力を習得すること最終目的に据える際、文法のほかにどのような要素を教育するべきか、およびにどのような方法で習得するのが有効かを、第二言語習得理論に照らして考察する。

研究計画・方法

申請書段階では、文献や理論をもとにしてラテン語の教育方法を考察する予定であったが、それに加えて、実際にその教育方法が有効か見るために大学生のラテン語初学者に対してラテン語の模擬授業を行った。授業内で参加者に取ったアンケートや授業内テストの結果から古典語への教育効果を考察する方法に変更した。

研究経過

①TPR について

1-1.TPR の概要

TPR(Total Physical Response 全身反応教授法)は、James Asher が提案した教授法である。学習者は自分で対象言語を発話するかわりに、指導員が対象言語で発話した指示に従って実際に体を動かす。例えば指導員が「立て」と発話したら学習者はその指示に従って席から立ち上がる。はじめに文法や単語の説明はされず、発話の意味は指導員の動作によって示される。学習者はその動作を真似ながら、発話の意味を自力で理解していく。このような指導法は幼児が第一言語を習得するときのやり方を再現しようという試みによるものである。乳幼児は自分では発話しないが、両親や周りの大人の言葉を聞いており、文法を指導されずとも自然と第一言語を習得する。乳幼児の第一言語の模倣をす

るとなると、この時期を越えると言語習得が難しくなるとされる臨界期が話題にされるが、James Asher によればこの指導法は年齢にかかわらず等しく効果が出ている学習法である[1]。

1-2.TPR をラテン語学習に用いる意義について

ラテン語は母語話者を持たないものの、テキストは多く残っており、その学習目標のほとんどが文献の読解にある。ゆえに、授業や教科書の内容は文法学習に重点を置く傾向があり、筆者が受けた指導もそのようなものであった。複雑な文法事項をより分かりやすく伝えるような教授法を考えることも重要であるが、基本の文法事項を定着させるという面で TPR はラテン語の学習に役立つと考えられる。なぜなら、基本事項の長期記憶および定着は、言語習得には肝要であり、TPR の特色として James Asher はその記憶の継続性を指摘しているからだ[2]。また、文法を重点に置く傾向があるラテン語の授業において、文法の説明を一切省いた教授法である TPR を行うことは新たな授業づくりの端緒になる可能性がある。

②模擬授業について

2-1.模擬授業の概要(人数、時間など)

上述の研究計画・方法から 2 度に分けて模擬授業を行った。授業は 10 月 21 日(水)と、10 月 22 日(木)に約 60 分間行った。授業の前後にはアンケートを行い、外国語学習に対する姿勢や経験、および TPR や TPR を用いた授業に関する印象、感想などを調査した。前者の参加者は 4 名、後者は 6 名であった。全員ラテン語の学習経験はなかった。

2-2.模擬授業の指導内容

模擬授業では、命令形(単数 2 人称、複数 2 人称)について、対格を取り方向を示す前置詞 ad について、および直接目的語として対格についての 3 点を習得目標に指導案を組んだ。

指導内容	到達目標	時間
【導入】 ・TPR に関する説明 ・ラテン語の文字と発音の説明	・これから行う教授法を理解する ・授業内でなされた発話による指示と文章が一致させられる下準備をする	5min
【指導段階 1】 ・簡単な動作命令 命令形現在複数 2 人称 立て/回れ/座れ	・指導員と一緒に指示された動作ができる ・指導員の発話が理解できる ・指示に対して素早く動作を行える ・指示の順番が変わっても動作が行える	5min
【指導段階 2】 ・方向を示す対格を伴った動作命令 命令形現在複数 2 人称 窓/椅子/扉へ行け	・同上	5min
【指導段階 3】 ・対格目的語を伴った動作命令 命令形現在複数 2 人称 扉/窓を触れ 目を開けろ/閉めろ	・同上	5min
【指導段階 4】	・学生自身が語彙表を使って文章を作り、クラス	10min

[1] *Learning Another Language Through Actions 7th edition*, 1-32
[2] *Learning Another Language Through Actions 7th edition*, 1-30, 3-30

・学生主体による TPR	に指示を出す	
【指導段階 5】 ・活用のバリエーション 片目/両目 ・人称のバリエーション 命令形現在単数 2 人称	・指導員と一緒に指示された動作ができる ・指導員の発話が理解できる ・指示に対して素早く動作を行える ・指示の順番が変わっても動作が行える	5min
【指導段階 6】 ・単語のバリエーション 顔/口/本	・同上	5min
【指導段階 7】 ・学生主体による TPR	・学生自身が語彙表を使って文章を作り、クラスに指示を出す	10min
【習得確認】 ・文字と発音の関係の確認 ・授業内容の文章の和訳テスト	・授業内で扱った文を日本語に訳すことができる ・授業内の発話で現れなかった文でも意味が理解できる	10min

授業では、【導入】の後、指導員がラテン語の指示を読み上げその指示に従った行動をする。(例: sta と発話して立ち上がる)そしてそれを学習者に真似させる。これを何度か繰り返した後、今度は指導員は指示を読み上げるのみで動作はせずに、学習者だけに指示された動作をさせる。これも何度か繰り返し、学習者が十分に指示と動作の対応を理解したように思われたら、次の指導段階に入り、同じ過程を繰り返して新しい要素を取り入れていく。

10 月 21 日の模擬授業時点では【指導段階 6】および【指導段階 7】は想定していなかった。授業が想定よりも早く進んだために、より多くの項目を入れても学習者が理解できるのではないかと考え 10 月 22 日の模擬授業に際して付け足した部分である。よって 21 日の模擬授業では【指導段階 6】の一部のみを指導し、【指導段階 7】については触れていない。使用した語彙は 10 月 21 日の模擬授業で 12 語、10 月 22 日の模擬授業では 16 語である。【習得確認】では、授業の導入で行ったラテン語の発音と文字の関係を再確認したのち、習得度を測るため、21 日では 5 問、22 日では 10 問のラテン語で書かれた命令文を和訳するテストを行った。

2-3.和訳テストの結果と分析

和訳テストの設問は以下の通りである。

01. Vertite.
02. Stāte, īte ad fenestram.
03. Īte ad sellam, sedēte.
04. Claudite oculōs.
05. Aperīte jānuam.
06. Claudite oculum. (※)
07. Stā, ad jānuam ī. (※)
08. Ōs aperi, verte. (※)
09. Faciem tange. (※)
10. Sedē, aperī librum. (※)

(※)06-10 は 22 日のみ出題した。

設問 05 および 10 は、指導員からわざと指示として出したことがなく、また、学生からの発話でも現れなかった文章である。TPR で学んだ内容を新規性のある文章に応用できるかどうかを見るために出題した。また、設問 07-09 では授業内で発話した指示とは語順を入れ替えたものを出題した。

下線を引いた設問 05, 10 を除く 8 問ではいずれも正当率が 80%以上であり、TPR における聴解がラテン語の文章理解にも接続できることが確認できた。特に着目したい点としては、他の設問と比較したときの設問 05, 10 の正答率の低さである。05 は 3/10 が、10 では 2/6 が誤った解答をしている。新規性のある文章でもある程度の正解率は得られたが、学んだことを自分で応用していく段階に至るには、さらなる練習が必要なように思われる。

また、参加者のうち 1 名が、すべての解答において命令形ではなく現在形で解答していた(「立て」と書くべきところで「立つ」と解答)。この参加者は、正解率がほかの参加者より非常に低く、指導員の発話が命令形による命令であることを理解していなかった可能性がある。発話の正しくない理解はそのまま学習者の間違った文法理解に直結することがわかる。このようなことを防ぐためにも TPR という教授法の正確な説明、及び学習者が正確に発話を理解していることを確認することが、指導員に求められるであろう。

③学習者アンケートの結果と分析

3-1.事前アンケート

アンケートの項目は以下の通りである。

A. ラテン語の学習経験

(a)【ラテン語を学習したことがある人】いつ、どれくらいの期間、到達度などを教えてください。

B. 外国語の学習は好きですか。

C. 外国語を学習することにどれくらい意欲がありますか。

事前アンケートでは、外国語学習に対する姿勢や経験を尋ねた。上述した通り、ラテン語の学習経験者は一人もいなかった。設問 C に対し、意欲的であると答えた参加者が 4 名、意欲的でないと答えた参加者が 3 名、どちらでもないとした参加者は 3 名であった。

3-2.事後アンケート

アンケートの項目は以下の通りである。[3]

A. TPR を用いた授業を受けたことがありますか。

(a)【TPR を受けたことがある人】どの科目で、いつ頃経験しましたか。

B. TPR を用いた授業は通常の授業より難しいと感じた

C. 指示に従って体を動かすことは楽しいと感じた

D. 指示に従って体を動かすことは緊張した

E. 指示内容が文字で示されないと不安に思った

F. 指示内容が文法的に説明されないと不安に思った

G. TPR は語学力の向上に有効だと思う

H. 授業内で指示された内容は十分に理解できた

I. 音声で指示された動作と、文章（単語）を見て、意味を一致させることできた

J. 通常の授業より TPR を用いた授業の方が気楽に感じた

K. 仮に授業内で見知らぬ人と TPR のペアワークをすることになったら緊張する

L. 仮に授業内で知人と TPR のペアワークをすることになったら緊張する

M. TPR を受けてみた感想をできるだけ詳しく書いてください。

N. TPR を用いた授業は大学生には幼稚すぎると感じた(※)

O. TPR の説明がされずに TPR による授業が行われたら、自分には心理的抵抗があったと思う(※)

[3] アンケートの設問は勝川のものを基本に、何問か独自に付け足して作成した。

(※)設問 N, O は 22 日のみ回答を採集した。

事後アンケートでは、授業を踏まえた上で、学習者の TPR に対する考えを尋ねた。設問 B~L, N,O では、1 をあてはまらない、5 をあてはまるとした 5 段階評価で答えてもらった。おおむねどの学習者も TPR には好意的な印象を持った回答をしていた。だが、設問 D, K には 10 名中 4 名、設問 E では 10 名中 2 名、設問 F では 10 名中 3 名、設問 N,O では 6 名中 2 名が心理的抵抗や不安があると回答している。座学による教授法で個人が勉強するという方法に慣れた日本人学生にはやはり、身体を動かしたり他の人と交流したりする TPR は少なからず抵抗があるものだといえる。一方で設問 L では全員があてはまらないと回答しているため、クラス内での信頼関係ができあがっている場合は非常に効果が期待できるともいえる。今回の授業では、全員が知り合いの状態であったため、習得がスムーズに進んだとも考えられる。実際の授業で TPR を行うときはこの面からの配慮が必要となるだろう。

自由記述の感想では、「ハードルが下がった」「楽しかった」などの肯定的な感想と同時に、「知らない人とやるとなったら、逆にやりづらい」「行動に表しにくい文章の習得が難しくなってしまうのではないか」といった心理的抵抗や発展的学習に対する不安に言及するものが見られた。学習者にストレスがあると TPR を取り入れた授業に真剣に取り組まなくなる恐れがあり、このような不安を排除しなければ習得はスムーズに進まないだろう。

研究成果

模擬授業と確認テストの結果から、ラテン語のように読解が主となる古典語でも、TPR が有効だということが確認できた。日本における古典語の授業および教科書では、基本的に活用や格の語尾の暗記、文法理解に主眼が置かれることが多いが、英語など現在も使われている外国語の教授に用いられている方法でも、古典語は学習できるということが証明できたと思う。

一方で、伝統的な手法とは異なる教授法は、学生の誤った文法理解や、発展的学習への不安を生むことも分かった。実際に授業へ導入する際は、このような学生の不安をカバーするためにも、全てを TPR のようなアクティブラーニング的な学習で賄うのではなく、伝統的な座学による授業とうまく組み合わせることが必要であるだろう。

現在はアクティブラーニングの方法も充実してきており、古典語の指導者も伝統的な方法だけでなくこのような方法を取り入れていくべきであると感じる。

参考文献

James J. Asher, *Learning Another Language Through Actions 7th edition*, California(America), 2009(初版 1977 年)

小坂光一 「２つの教授法―TPR と CLL―」『ことばの科学』1、1988 年

勝川裕子「初級中国語授業における TPR の実践」『ことばの科学』 31、93-110、2017 年